

真矢正弘氏『田村塾と歩んだ15年』

2017年10月13日開催

市民活動支援センター4階セミナールーム2号

NPO 法人田村明記念・まちづくり研究会 公開研究会記録概要版

田口 NPO 田村明記念・まちづくり研究会で副理事長をしております田口俊夫です。今日は公開研究会で、真矢正弘さんをお願いします。長年、まちづくり塾を運営されてきました、通算すると15年で、現在は休命中ですが。もともとは田村さんを囲む横浜市の生涯学習事業が母体になっています。

真矢 こんばんは、真矢正弘と申します。「横浜まちづくり塾」は略称で「田村塾」といって、「実践まちづくり塾」と「横浜まちづくり塾」の二つの時期があり、双方で世話人をしてきました。田村さんだけでなく私は松下圭一さんとの関わりはあって、この塾をずっと続けることができました。昨年7月で辞めて以降、何となくほっとしています。2010年の1月25日田村さんが亡くなってからも続けて、昨年の7月までやっていたわけです。最初は市職員だった小林明仁さんが、横浜市教育委員会の生涯学習活動として1年間、市民向けフォーラム「田村市民ゼミ」としてやりました。

2001年4月に実践まちづくり塾を始めました。最初が4月25日の県民サポートセンター会議室でやすけども、なんと定員30人に50人近く集まったんですね。引き続き先生のお話を聞きたいってことで、ぜひ続けてほしいってことで、いろいろな方に呼び掛けをしました。実践まちづくり塾がちょうど50回目で、これで実践まちづくりではひとまず終わりにになりました。それが『神奈川新聞』に少し取り上げてくれと要請して、記事にまとめていただきました。

2007年4月から横浜まちづくり塾っていうのが始まったんです。第1回が4月16日にやって406号室が30人の定員のところが50人近く集まりました。2010年12月、田村さんが亡くなった後に、都市科学研究室にいた中川久美子さんにお話をさせていただきました。企画調整局の名簿を見ると、松本得三さんっていう方が新しくできた都市科学研究室の室長をやられた。『調査季報』だけじゃなくて、『市民生活白書』っていう、お役所の白書らしからぬ白書を作ったりされた。なぜそれができたかっていうと、『朝日新聞』の実力者なわけです。松本さんを、私は直接存じ上げませんが、松本さんが4年やった後、第2代目の都市科学研究室長には、船橋成幸さんがなりました。この船橋さんに2012年3月、まちづくり塾で話をさせていただきました。船橋さんも異色で、社会党中央執行委員でした。鳴海正泰さん系統で1万人集会とか、区民会議とか、革新自治体を束ねる仕事とかを担当されました。船橋さんは社会党の活動家上がりですから、その当時は随分、横浜市の職員にも元気のいい若者たちが集まりました。

そして、田村さんの最終講義（2009年12月17日）には30人が集まりました。田村さ

んが講義の日、大変に体調が悪かったので、お住いのマンションの集会場で行いました。

そのときに、田村さんが設立に関与した自治体学会から、学会の第1号名誉会員章が田村さんに授与された。そして、東京の塾（現代まちづくり塾）でも横浜の塾でも、常に田村さんが言っているように、会則はないし、去る者も追わない、入る者は誰でも来いという、自由な市民の集まりでした。

少々私と社会党の関係についてお話します。飛鳥田さんが市長に1963年に当選して、その頃まだ東京都政調査会にいた鳴海正泰さんが横浜市に招かれるわけです。この東京都政調査会の向こうをはるように、横浜市政調査会ができたのです。その設立に松下圭一さんも関与された。松下さんは一昨年の5月にお亡くなりになりました。松下さんは1959年ぐらいから社会党の江田三郎のブレーンの的に活躍をした。地方自治とか住民運動、あるいは地域民主主義っていう言葉を松下さんは、随分強調されていた。

私は実はこういう写真があるのです。真ん中に立っているのが私です。1968年の12月7日伊豆長岡で、全国から市長さんが集まって集会があり、取材にしました。そこで、飛鳥田さんに「真矢君も写真撮らないか」って言われてですね、シャッターを押したのが松下さんか鳴海さんがシャッターを押してくれました。なぜかという、1967年私は東京教育大学を卒業しました。『教育大新聞』っていうのは月2回出した、かなり活発な学生新聞でした。1967年に日本社会党中央本部機関紙局に入りました。それで松下圭一さんの監修の下に国民自治年鑑と国民政治年鑑の編集を担当しました。ただし、わずか、3年で辞めます。これはちょうど、1969年に社会党が総選挙で大敗北を喫して、辞めて徳間書店に入りました。もともと高校時代は文芸部において、下手な小説書いてましたので。松下さんは、とにかく若くして世の中に出て、独身時代が長かった。確か30代の終わりか40代になったところで結婚なさったんで、とにかく私が知り合ったときはちょうど15ぐらい年上で、いい兄貴分で、いろいろ銀座あたりに遊びに連れていってくれました。

企画調整室に斎藤栄さんがおられたんですけども。手帳をみると、1972年の1月11日、横浜市役所に斎藤栄さんを訪ねて原稿もらったということが分かりました。その当時、斎藤栄さんは企画調整室におられました。斎藤さんは1966年度に『殺人の棋譜』という将棋の世界を描いた小説で、江戸川乱歩賞を受賞しました。ミステリーが売れる時代じゃないんで、筆一本で食べられる自信がなかったのでしょうか、5年後はまだ横浜市の職員だったのです。そこに私は、エッセーを頼みに行って、原稿いただきに参上した時、ちょうネクタイで非常にはつらつとした姿でした。

真矢 当初は、田村さんが市民向け講座で語り残したことを語る事がメインです。大体、横浜市の職員の場合、課長クラスがレポートしてくれました。そういう方の中には、六大事業について延々と語る方もいるのです。つまり、目の前の田村さんが六大事業の仕掛け人であったっていうことを、あんまり結びつかないようでした。六大事業のことを、いきなり語る方なんかもいて、ちょっと驚いたぐらいですね。田村明の時代、あるいは飛鳥田

一雄の時代は、過去の話になったかなと思ったようなこともありました。

真矢 まとめはしていません。田村さんは簡単なレジュメだけを用意されて、記録を起こしたっていうのは最後の最終講義ぐらいです。あとは録音があるだけです。できるだけいろんな方に、いろんな角度から横浜のまちづくりについて語っていただくということで、世話人会でいつも検討していました。活動の成果はあるといえばあるし、ないといえないう。つまり、田村さんも私も、もっと横浜市の若い職員に参加してほしかったっていうのがあるのです。田村さんが言っているように、都市にはいろんな考えの人がいるのだから、いろんな人と付き合うのがいいんじゃないか。それが田村さんの、リベラリストとしてのバックボーンなのです。あとは全くの無報酬で市民がそういう一つの勉強会を支えてやってきた、実は講師も全く無報酬です。遠隔地から来られる方には交通費は出しますが、つまり、学ぶということは、そういうことじゃないかと思っています。それはなぜかっていうのは、松下圭一さんとお付き合いすることで、まちづくりなり市民自治なり、都市自治について自分なりの実践を一つの住民運動として少しやってみた。そういったことを横に広げて、人に語り合うってことは、自分の役割なんじゃないかとずっと考えていました。

小林 きょう、改めて、真矢さんがいたからこうやって実践まちづくり塾、横浜まちづくり塾をやったんですね。改めて真矢さんと田村さんの関係性が、その中心にあって、そこに社会党とかそういうものも。松下圭一さんの話は真矢さんから若干聞いてはいたんですけど。2016年4月21日の最後まで、まちづくり塾の第2期ですね。第2期の塾を始めるにあたって、真矢さんと清水さんと私の三人が田村さんに呼ばれて、ぜひ塾を続けたいので、事務局というか裏方を田村さんに直接お願いをされた。

真矢 田村明さんと松下圭一さんは、個人的にはそんなに親しい間柄ではないと思います。二人とも、のんべえですけど。松下さんのほうは、ずっと俗人ですから。あの人はとにかく、いつも必ず『週間朝日』持っていました。とにかくそれで、銀座の飲み屋の飲み方、うまい人ですよ。それで散々脇で見っていましたので。

以上